

学会ハイライト

第116回日本皮膚科学会総会を振り返って

(2017年6月2日(金)～4日(日), 仙台国際センター)

相場 節也

第116回日本皮膚科学会総会会頭

東北大学大学院医学系研究科皮膚科学講座教授

はじめに

この度、東北大学皮膚科学教室が主管を務め、第116回日本皮膚科学会総会を6月2日(金)～4日(日)の3日間、仙台国際センターを会場に開催させていただきました(図1)。学会開催の数日前までは、不順な天候が予想されていましたが、会が近づくにしたがい天気予報が改められ、3日間恵まれた天候の中で開催できました。終わってみれば、降り続いていた雨のおかげで、杜の都仙台の魅力を満喫していただけたのではないかと思います。当初、地方開催ということで参加者の減少が懸念されましたが、私たちの予想を上回る5,000人近い学会員、関連企業の皆様にご参加いただくことができました。



図1 第116回日本皮膚科学会総会(仙台国際センターエントランス)。



図2 会頭講演。

本学術大会のテーマ

Neo-Dermatologyの時代を生き抜く(図2)

Neo-Dermatologyという言葉は、私が調べたかぎりでは、Kligman先生が2002年のJournal of Investigative Dermatologyの論文で、ヨーロッパ中心の記載皮膚科学に対し、20世紀中頃に始まった米国中心の研究皮膚科学、evidence-based皮膚科学を称して用いたのが始まりです。Kligman先生が意図したNeo-Dermatologyは、その後の分子生物学、遺伝子改変マウスの進歩に後押しされ病態解析皮膚科学へと発展しました。しかし残念ながらこれらの手法では、ヒト皮膚疾患の病態を類推し仮説を打ち立てることはできても、

それを検証することはできませんでした。ところが、ここ10数年前から登場した新たな遺伝子解析手法や生物学的製剤により、これまでの仮説がたちどころに検証され、われわれが以前には経験したことのない有効な薬剤が次から次へと市場に登場するようになりました。Kligman先生が意図したNeo-Dermatologyとは別次元のNeo-Dermatology(新生皮膚科学)の到来です。

実際、最近の皮膚科を取り巻く環境は激変しています。乾癬、悪性黒色腫に始まりアトピー性皮膚炎、蕁麻疹の治療にまで拡大する生物学的製剤、分子標的薬は、今から10年前には想像もつきませんでした。これらの薬剤の普及により、これまでクリニックで治療していた患者さんが市中病院、大学病院の皮膚科、さらには内科や整形外科で治療されるようになるかもしれません。また、これだけ高額な医療費を現在の保険制度で維持続けられるとはとうてい思えません。さらに今後、新専門医制度の導入、総合診療医の出現と続き、そのうえ、telemedicineの普及は目の前に迫っていますし、遠からずAIが皮膚科診断の一端を担う日が来ると思われます。

特別企画

そこで第116回総会では、Neo-Dermatologyの時代に皮膚科診療を取り巻く環境がどのように変わるのか、またその新しい環境の中で皮膚科医はどのようにしたら生き残れるのかを以下の4つのシンポジウムを通して考えてみました。

1) 医療制度の側面から、これからの皮膚科診療を考える「Neo-Dermatology：生き残りをかけた皮膚科の未来」

2) 近未来の皮膚科診療、病診連携のあり方を考える「Neodermatology—near future & beyond：皮膚科診療はこう変わる」

3) これからの医学研究、皮膚科学研究の未来を考える「皮膚科研究の目指すべき道とは」

4) 皮膚科診療にどのようにAIが取り込まれるかを予測する「より深くAI(愛)ある医療へ」

また、今回の総会のもう一つの大きな使命が、



図3 土肥記念講演 Thomas Ruzicka教授。

東北地方の震災からの復興、再生の後押しでした。そこで、「2011年3月11日、そしてそれからの道のり」という特別企画の中で、震災のときに活躍された3人の演者の方たちに当時を振り返るとともに、今後いつ、どこでおこるとも限らない災害に対する心得をお話いただきました。

最後に、仙台は魯迅が日本で学生時代を過ごしたゆかりの地です。東京大学教授藤井省三先生にオーガナイザーをお願いし、魯迅の足跡とその業績をたどるシンポジウムを行いました。まったく皮膚科と関連のないシンポジウムにもかかわらず、オーガナイザーが驚くほど多数の参加者を数えました。また藤井先生は、その後、第116回皮膚科学会総会印象記を『日本経済新聞』中国語ネット“日経中文網”連載コラムに寄稿してくださいました。
(<https://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/26032-2017-07-17-04-54-00.html?start=1>)

招請講演

土肥記念講演は、Ludwig-Maximilians-Universität MünchenのThomas Ruzicka教授にお願いしました(図3)。Ruzicka先生は、多くの日本人研究者と親交があり、また最近ではアトピー性皮膚炎に対するIL-31抗体の臨床治験を日本人研究者と共同で行われました。講演では、基底細胞癌の多彩な臨床像、発症にかかわる分子メカニズム、治療法など幅広く講演されました。また特別



図4 特別講演 Stephen I. Katz教授.

講演のKatz先生は、これまでの多くの日本人研究者との交流を振り返られた後、NIHのdirectorとして目の当たりにされてきた過去40年間の医学、皮膚科学の目覚ましい進歩について述べられました(図4)。

教育講演

今回の総会では、教育講演はおしなべてどの会場も多数の参加者が集まり、多くの会場で参加者が200人を超していました。とくに参加者が多かったシンポジウムをピックアップすると、ダーモス

コープ、アトピー性皮膚炎、痒みの講演で、どここの会場もほぼ満席の状態でした。今年の新しい傾向として、それらに加えて、新薬の出た蕁麻疹、今でもさまざまな新規アレルゲンが同定されている食物アレルギー、多くの皮膚科医が治療に難渋している痒疹、常に知識のブラッシュアップの必要な感染症などの講演に多くの参加者が集まりました。また例年どおり、ダーモスコピー道場(図5)、皮膚病理道場(図6)、皮膚外科道場には多くの先生方が参加され、皆さん熱心に受講されていました。

ランチョン、イブニングセミナー

教育講演同様、スポンサードセミナーも参加者が多く、初日のランチョンセミナーでは、参加者数が主催者の予想を上まわり用意していた弁当が足りなくなるほどでした。次から次と登場する生物学的製剤の流れを反映して、乾癬関連のセミナーが目立ちましたが、意外に製品の宣伝主体ではなく、皮膚疾患とその周辺の臨床や基礎的知識の啓発を主体としたセミナーも多数みられ、教育講演で踏み込めなかった内容を補填してくれました。腸内細菌、皮膚細菌叢、皮膚バリア機能、irAEマネジメント、ヘルペス、疣贅治療などに多くの



図5 ダーモスコピー道場2017.



図6 皮膚病理道場.

参加者が集まりました。また化粧品会社のセミナーも例年になく多く、内容も皮膚科医に必要な洗浄剤の基礎知識、化粧品の安全性確保、皮膚の可視化、皺研究の基礎など興味深いものが目立ちました。

一般演題

すべて3分の口頭発表で行った一般演題には420の演題が集まりました。その中で、15演題に優秀一般演題賞を授与しました(図7)。またAGORA for Young Asian Dermatologistsでは、アジア各国の若手研究者が一般演題、Keynote lecture併せて

20に近い演題を発表し、そのうち1題に優秀演題賞を授与しました(図7)。

優秀一般演題賞

「結節性病巣がある外陰部バジェット病における肉眼所見とダーモスコピー所見による浸潤度評価」がん・感染症センター都立駒込病院皮膚腫瘍科 永井幸司郎先生

「進行期悪性黒色腫においてニボルマブ投与後に白斑が出現した4例の検討」

埼玉医科大学国際医療センター皮膚腫瘍科 松谷泰祐先生

「壊死性筋膜炎と蜂窩織炎の鑑別におけるプロカルシトニン(PCT)値の有用性について」広島大学病院皮膚科

梅田直樹先生



図7 優秀一般演題賞, AGORA優秀演題賞授賞式.



図8 懇親会。

「菌状糸肉症の早期皮膚病変・皮膚病性リンパ節炎・末梢血におけるT細胞クローンの不均一性」岡山大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚科学 平井陽至先生

「最近10年間に当科で行った田植え植皮10例のまとめ」山形市立病院済生館皮膚科 角田孝彦先生

「IgA抗tTG抗体とIgA抗TG抗体が陽性であったDuhring疱疹状皮膚炎の1例」順天堂大学浦安病院皮膚科 黒崎裕子先生

「環状紅斑を伴ったStiff person症候群の1例」長崎みなとメディカルセンター市民病院皮膚科，長崎大学病院皮膚科・アレルギー科 森寄仁美先生

「GJA1モザイク変異を同定したInflammatory linear verrucous epidermal nevusの世界第1例」慶應義塾大学医学部皮膚科 梅垣知子先生

「アトピー性皮膚炎表皮におけるNF- κ Bを介した Δ Np73によるTSLPの産生制御」札幌医科大学皮膚科 熊谷綾子先生

「特発性血小板減少性紫斑病を合併し血清TARC値が低値であったアトピー性皮膚炎の1例」東北大学，東照宮駅前皮膚科クリニック 小澤麻紀先生

「本邦における掌蹠膿疱症患者の併存疾患について」聖母病院皮膚科 宮田龍臣先生

「頭部血管肉腫の薄壁型肺転移におけるD2-40とMMP-1発現：剖検23例の免疫組織学的検討」北里大学医学部皮膚科 増澤真実子先生

「全身性エリテマトーデス患者における血清MFG-E8値の検討－脳血管障害との関連について」群馬大学大学院医学系研究科皮膚科学 岸史子先生

「DPP4阻害薬サキサグリプチンによる丘疹-紅皮症(太藤)型薬疹を生じた1例」浜松医科大学皮膚科 影山葉月先生

AGORA賞

「Allergen Protease Activity Dependent Skin Inflammation and Epicutaneous Sensitization」

Department of Dermatology and Allergology, Juntendo University Graduate School of Medicine, Tokyo, Atopy (Allergy) Research Center, Dr.Punyada Suchiva

おわりに

最後に、本学会では5,000人近い会員の皆様にご参加いただくことができました。学会の運営，コンgresバッグ，皆様の宿泊，飲食，お土産等で仙台ひいては東北地方の復興に多少なりとも貢献できたのではないかと考えています。また東北出身の小山実稚恵さんのピアノ演奏，福島県立平商業高等学校のフラダンス(図8)，懇親会での東北6県キッチン，緑に囲まれた学会場など東北地方の魅力も多少なりとも味わっていただけたのではないかと思います。個人的には，多くの住民が生まれ故郷を失った福島県から来てくれた平商業高等学校の皆様が，素晴らしい笑顔で踊ってくれた童謡「故郷」に涙がこぼれました。